

[別紙 2]

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 阿部真理子

適切な防災対策を行うためには、正確な災害状況の想定が欠かせない。しかし、この災害状況を適切に想定するための方法、必要となるプロセスなどがはっきりしていないため、一般の人が適切に災害状況を想定することは難しい。結果として、防災訓練をはじめ、現在行われている防災対策には、実際の災害状況とのズレや偏りが見られるものも少なくない。

災害状況を適切にイメージする能力を高めるには、実際に被災体験を積むことが効果的であるが、災害大国日本といえども、時間や地域を限定すれば、全ての人々が実際に災害体験を積むことは不可能である。また災害の規模や質は、発災時の様々な条件や対象地域の特性の影響を受けるために、同規模の地震や台風が襲っても、それが引き起こす被災状況は大きく変わる。さらに発災からの時間経過に添った被災者の対応によっても状況が大きく変化するので、たとえ災害を体験した人にとっても、それは「数多の災害状況の中の1パターンを体験した」にすぎず、実体験の教訓が将来の災害時に活用できないことも起こりうる。

よって、①災害状況を上記のような様々な因子を設定した上で発災後の時間経過に沿ってイメージし、②事前・事後の対応の変化によって状況がどのように変化しうるかを想定する能力（これを防災イメージネーションと呼ぶ）を高めることは、災害の未体験者はもちろん、災害体験者にとっても非常に重要である。

本論文では、上記の点を踏まえ、個人から集団にいたる「防災イメージネーション」の形成を目的として、「目黒巻」という防災イメージネーションのトレーニングツールを考案し、それをを用いた防災ワークショップ（WS）に関する研究と実践活動を行った。また災害状況をイメージする環境形成支援の一環として、過去の災害や各分野の専門家の意見を踏まえた参照用災害状況ストーリーを検討した。その際、対象集団としては保育園を単位とする関係者集団を、災害としては日本における代表的な災害である地震災害を対象とした。「保育園」を対象とした理由は、「乳幼児が災害時要援護者であること」、「乳幼児は将来の社会を担う存在であること」、「乳幼児の親が現在の社会を担う世代であること」、「親にとって具体的な防災の取り組みのきっかけとしては、子供の防災対策の方が取り組みやすく、これが自分や地域の防災対策に波及しやすいこと」、「乳幼児は災害に対してどこまで備えるかを自分で選択できないこと」などである。

以下に、7章からなる本論文の各章の概要を説明する。

第1章「序論」では、本研究の背景と目的を述べ、既往の研究を概観することにより本研究の位置付けと構成、各章の概要を説明している。

第2章「保育園現場の日常と防災対策」では、フィールドワークやヒアリングを通して把握した保育園現場の日常および防災関連の諸活動と課題をまとめている。また行政等の関連機関と保育園との防災における関係についても解説している。

第3章「ワークショップの設計」では、保育園での集団的防災イメージーション形成のための防災ワークショップ「目黒巻WS（ワークショップ）」の実践によって得られた成果および実践上の諸課題について述べている。目黒巻WSは、目黒（1999）によって考案・実践されている災害状況のイメージトレーニングメソッド「目黒メソッド」の長所を損うことなく簡便化し、実施しやすく工夫した「目黒巻」を用いたワークショップ（WS）である。

第4章「ワークショップの実践と考察」では、一連の目黒巻WSの実践と普及の取組みとその成果について記述している。このワークショップの実践によって、「WS参加者（保育園職員または保護者）間の地震防災イメージーションの共有と向上による、地震防災対策の改善」という1次的成果に加え、「保育園職員および園児保護者の地震防災イメージ情報の集積」という2次的成果も得られた。目黒巻WSの実践に取り組む際に、しばしば課題や葛藤が生じたが、これらも保育園の防災に関する今後の研究・実践の一助となると考え、含めて記述した。また、目黒巻WSの実践によって得られた保育園職員および保護者の地震防災イメージ情報に関する分析と考察を行った。

第5章「地震防災イメージーション向上のための支援情報」では、保育園職員や保護者らが地震防災イメージーションを共有・向上するために必要な支援情報に関してまとめた。重要な支援情報の一つとしては、災害イメージーションWSの際に参考にできる、災害発生前後の経過時間帯や課題の内容に沿った参照情報の提供が挙げられる。そこで、過去の災害や乳幼児福祉・防災分野の知見をもとに、WSの際に参加者が参照できるような「参照用災害状況ストーリー」のモデル例を作成するとともに、その作成過程を整理した。過去の災害事例としては、主に新潟県中越地震（2004年）の被災地の妊産婦・乳幼児保護者に書いて頂いたアンケートを参考にした。作成した災害状況ストーリーを基に、成果物として東京都の妊産婦・乳幼児保護者向けのパンフレットを作成した。

第6章「保育園における地震防災の再考」では、前章までを踏まえて、防災イメージーションに着目した保育園における地震防災について検討し、保育園の防災対策を支援する際に考慮すべき事項を整理した。

第7章「結論」では、本研究全体を通して得られた成果を総括するとともに、今後の方向性や課題について整理している。

以上のように本研究では、保育園における既存の防災対策の再検討を目的として、地震を対象災害とし、保育園の個人から集団に至る防災イメージーションを形成するためのワークショップの実践に取り組んだ。このワークショップでは、まず地震発生時の状況に影響を与える諸要因（特性）を考慮し、各々の参加者が自分を主人公とする災害発生時の物語を時系列上に記述する。この作業により、記述者の災害イメージーションが形成されると同時に、疑問や不安、課題も顕在化する。その後、並べた物語をベースに参加者間で話し合うことにより、災害イメージーションおよび疑問や不安、課題が共有され、集団としての防災イメージーションが向上する。本論文では、以上のワークショップの設計および実践による検証を行うとともに、保育園の地震防災イメージーションを形成するために必要な支援についても考察した。

以上の内容は、将来の地震時に保育園における被害の大幅な軽減につながるものであり、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。